

Title	追悼・田中實先生
Sub Title	
Author	池田, 真朗(Ikeda, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.1 (1994. 1), p.142- 143
Abstract	
Notes	田中實先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940128-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

印象深く思われます。そして、あらゆる細事に対しましては、温顔のうちにすべてを受け流されておられるようにも、拝見致しました。そのようなところにも、先生流の流麗なスマートなダンディズムがみられたように思われます。

先生が終生のライフワークの一つとなされておられました信託法の御研究、それにますます邁進なされておられました御様子を想いますと、先生御自身におかれるのみならず、学問それ自体におきまして、誠に惜しみて余りある御逝去だと思われてなりません。スタッフ・セミナーである民法研究会での永年にわたる御教導並びに御厚誼に対しまして、心より幾重にも感謝申し上げますと共に、遙かドイツの地より謹しんで心より先生の御冥福をお祈り申し上げます。

法学部教授 齋藤和夫

追悼・田中實先生

ご遺族からのお知らせは、ご葬儀がすべて終わった後にありました。その数日後、私は内池教授とご自宅をお訪ねし、先生のご遺影にお別れをしてまいりました。ご自宅を辞して駅に向かう道すがら、こういう静かなお別れの仕方を望まれたのも、先生らしいお考えかと、ふと思いました。

私は、学部時代に一つだけ田中先生のご講義を聞いただけで（経済学部の民法）、大学院の頃も、先生の私法学基礎理論等に出させてはいただきましたが、先生のお人柄を親しく存じあげていたわけではなかったもので、なかなか個人的なご指導をいただく機会もありません。助手に残りました。個人的な形で先生のご恩を最初に受けたのは、日本私法学会でのことと思います。もう十七、八年も前のことになりましたが、学会会場で、先生は新米の私をお引き回し下さり、他大学の有力な先生方に紹介して下さいました。

その後、何年もの間、本塾の民法部会では、田中先生が最年長、私が最年少という状態が続き、いつも端正なお姿で合

同演習の報告者の隣に座られる先生は、私には幾分遠い存在でした。それが、先生のご退職に際し、長くご担当になっておられた法律学科民法Ⅳ（債権総論）の講義を私が引き継がせていただくことになり、先生の最終講義の司会役が私に回ってきました。

最終講義は、先生ご自身の回想を中心にしたものになりました。戦争によって人生の目標を失いかけた先生に、現本塾名誉教授の伊東乾先生が、共に大学に残って研究をするよう誘われたことを話され、「伊東君がいなければ今の私はなかった」とまでおっしゃられました。終了後のゼミ卒業生との懇親会は、会場にあふれんばかりの大変な人数で、先生のゼミ生に注がれた愛情を感じました。

研究生生活の後半、先生は信託法の研究に精力を注がれ、何冊かの研究書・教科書を纏められました。本塾に信託協会の寄付講座が置かれたのも先生のお力によるものと思います。

定年でご退職の後も、つい数年前までは、この講座の担当者として、三田でお元気に教鞭を取られました。あわせて定年後に創設段階から参加された駿河台大学でも、法学部の看板教授として活躍になられたのは周知の通りです。

学会理事長、司法試験委員等も歴任され、学者として、こ

立派な生涯をまっとうされたと思います。ただ、それにもかかわらず、私のお付き合いさせていただいた（壮年以降の）田中先生は、何か「諦観の人」という印象がございました。人生にあえて竿差さず、流れるままに暮らして行かれるような、そんな人生観が、少なくとも私には、ほの見えました。お気持ちのどこかで、あの戦争以後の人生を、おまけと考えたいらっしゃったのかもしれませんが。

先生の学統を継ぐことは私には困難ではありますが、せめてその職責を継ぐことくらいはと考え、民法Ⅳの授業も、学会活動も、私なりにしっかりとやっていきたいと考えております。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

法学部教授 池田真朗